

筑後国府跡

—第 288 次発掘調査報告—



平成 29（2017）年 12 月
久留米市教育委員会

序

久留米市は「一人ひとりを大切に、安心、安全、活力に満ちた久留米づくり」を進め、日本一住みやすいまちを目指しています。その取り組みのひとつとして、久留米の歴史を調査し、多くの人々に知っていただくことで、郷土愛を育めるよう努めています。

筑後国府跡第 288 次調査では古代・中世の土坑、近世の墓・溝など、当時の人々の生活を知る貴重な資料を得ることができました。

今回の発掘調査に際して、土地所有者の■■■■様と近隣住民の皆様に多大なご協力をいただきました。心から御礼申し上げます。

平成 29 年 12 月 25 日

久留米市教育委員会
教育長 大津 秀明

例 言

1. 本書は、平成 28 年度に■■■■氏の委託を受けて、宅地造成に先立ち実施した、筑後国府跡第 288 次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は久留米市教育委員会が主体となり、市民文化部文化財保護課の小川原励が担当した。
3. 遺構実測図・土層図の作成は、小川原と山田治代が行い、浄書は中野美代子が行った。遺物実測図の作成と浄書は、小川原が行った。
4. 遺構写真はマミヤ RZ67、遺物写真はデジタルカメラニコン D700 を用いて小川原が撮影した。
5. 図面の方位は全て座標北を示す。基準点の座標は、国土調査法第Ⅱ座標系（日本測地系）を用いた。なお平成 28 年に発生した熊本地震後の座標補正は行っていない。
6. 本書に使用した遺構の略記号は、SD－溝、SK－土坑、SP－ピット、ST－土壇墓を示す。
7. 遺物の色調は、『新版 標準土色帖』（日本色研事業株式会社、平成 9 年）に拠った。
8. 出土遺物観察表と写真図版の遺物番号は同一である。
9. 出土遺物・図面等の諸記録は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管されている。
10. 本調査の略記号は TKH－288、調査番号は 201623 である。
11. 本文の執筆・編集は小川原が行った。
12. 表紙の写真は調査区全景（南から）。

本 文 目 次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の記録	4
IV. 総括	12

I. はじめに

1. 調査に至る経過

本調査は、宅地造成に伴う事前の発掘調査である。平成 28 年 8 月 3 日、土地所有者の■■■■氏から、久留米市合川町 1086 における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。当該地一帯は周知の埋蔵文化財包蔵地である筑後国府跡の範囲内であり、確認調査でも遺構が確認されたため、発掘調査が必要である旨を回答した。8 月 23 日、土地所有者から発掘調査の依頼が提出され、土地所有者と久留米市長檜原利則は、平成 28 年 11 月 21 日付で筑後国府跡第 288 次調査の委託契約を締結した。調査範囲は道路敷設予定地に設定した。調査面積は 181 m²である。

現地での発掘調査は、平成 29 年 2 月 6 日に着手して 3 月 24 日に終了し、同年 12 月 25 日に整理作業を終了した。

2. 調査の体制

(平成 28 年度)

調査主体：久留米市教育委員会

教 育 長：堤 正則

調査総括：久留米市 市民文化部

部 長：野田 秀樹

文化芸術担当部長：甲斐田忠之

次 長：竹村 政高

文化財保護課

課 長：馬場 博文

課長補佐：山崎万里子 白木 守

主 査：水原 道範

事務主査：豊福 早苗 塚本 映子

庶務担当：豊福 早苗

調査担当：小川原 励

整理担当：米澤美詠子

(平成 29 年度)

調査主体：久留米市教育委員会

教 育 長：大津 秀明

調査総括：久留米市 市民文化部

部 長：野田 秀樹

文化芸術担当部長：甲斐田忠之

次 長：西村 信二

文化財保護課

課 長：馬場 博文

課長補佐：山崎万里子

課長補佐兼主査：白木 守

主 査：水原 道範

事務主査：豊福 早苗 塚本 映子

調査担当：小川原 励

整理担当：米澤美詠子

発掘調査現場臨時職員（平成 28 年度）

案納 哲夫、大坪 進、國武 三歳、中村 政登、堀江 俊文、森山美千代、柳 鈴子、山田 治代、

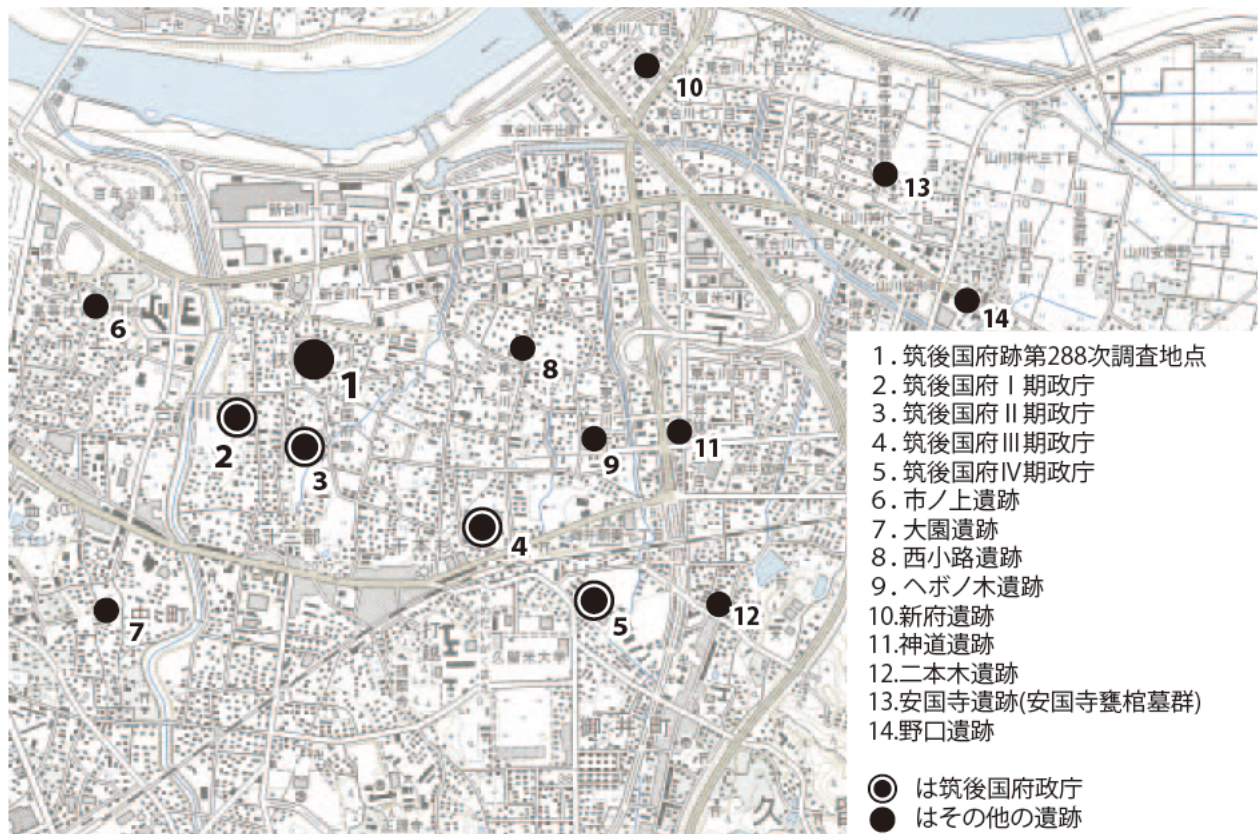
発掘調査整理臨時職員

大津山恵津子、中野美代子

Ⅱ. 位置と環境

筑後国府跡の位置する久留米市は、九州最大の穀倉地帯である筑紫平野の中央に位置し、交通の要衝として発展してきた。筑紫平野の南側には耳納山地が連なり、その西端には延喜式内社である高良大社が鎮座する高良山（312.3m）が聳える。ここから北西に派生する通称枝光台地に筑後国府跡は立地し、現在の久留米市街地の東方約1.6km付近に、東西1.0km、南北0.7km程度に展開している。この台地の南端には水縄断層帯が東西に伸び、断層崖下には湧水点がいくつも見られる。台地の西側には高良川が、東側には井田川が流れ、北方の筑後川氾濫原、南方の水縄断層系の断層崖とともに国府域の四至を画している。

耳納山地西端付近は、市内でも多くの発掘調査が行われている地域である。旧石器時代については二本木遺跡、安国寺遺跡、野口遺跡で、縄文時代以降の埋土・包含層から遺物が出土している。縄文時代は前～後期の野口遺跡を始め、石冠や石棒が出土した西小路遺跡、筑後国府跡、神道遺跡、水洗遺跡、横道遺跡、新婦遺跡などで資料が得られている。弥生時代は中～後期の墓地とその祭祀の関係が注目される安国寺甕棺墓群を始め、筑後国府跡、市ノ上遺跡、ヘボノ木遺跡、二本木遺跡などで遺構や遺物が発見されている。古墳時代では周辺で遺跡がほとんどみられないが、奈良・平安時代の遺構や遺物は筑後国府跡を中心として、ヘボノ木遺跡、二本木遺跡など多くの遺跡から発見されている。



第1図 調査地点と周辺の遺跡分布図（1/25,000）



第2図 第288次調査地の位置と周辺の調査地図 (1/2, 500)

筑後国府について

7世紀中頃、大溝や土塁、河川等によって囲まれた枝光台地上に軍事的性格が強い前身官衙の遺構群が造営される。筑後国府は、筑後国が成立した7世紀末～8世紀前半にかけて、前身官衙の領域を踏襲して成立し、南北約180mの築地塀で区画された政庁的な官衙が古宮地区に営まれる（Ⅰ期政庁）。8世紀中頃、Ⅰ期政庁から東へ約200mに、築地塀で区画され、9世紀前半には礎石建物が築造される南北75m、東西67.5mの範囲に政庁が営まれる（Ⅱ期政庁）。Ⅱ期政庁と浅い谷を挟んだ南東約200m付近では、国司館跡も確認されている。Ⅱ期政庁は10世紀前半に火災により焼失したと推定され、さらに東へ約600m付近にⅢ期政庁を築造している。Ⅲ期政庁は幅約4mの大溝で区画された南北141m、東西137mの大区画をなし、内部からは、正殿や脇殿などの大型掘立柱建物が検出されている。付属する官衙群はⅢ期政庁の東側で確認されており、国司館と推定される施設も存在する。11世紀末には南東約400mへ再び移転し（Ⅳ期政庁）、『高良記』に見える「今ノ符」と思われるこの政庁は12世紀後半頃まで存続したようである。「五条頼元書状」（『豊後入江文書』久留米市史より）には、南北朝争乱期に懐良親王が「国府」に陣を置いた記事がある。実質的な機能は別として、国府の名称は14世紀まで存続していたと推測される。

調査地が所在する久留米市合川町東地区では昭和49年に行われた筑後国府跡第4次調査を皮切りに、これまで第124次、第195次、第200次、第227次、第234次の5回にわたって調査が行われている。第4次調査では弥生時代の磨製石斧が出土し、奈良時代の総柱建物や中世以降の掘立柱建物などを検出した。第124次調査では奈良時代後半の廂付建物を検出した。第195次調査では平

安時代の土壇墓や中世以降の溝、第 200 次調査では縄文時代の土坑や中世以降の土坑を検出した。第 227 次、第 234 次調査では縄文時代や弥生時代の遺物が確認され、弥生・奈良・平安・中世以降の掘立柱建物や土坑などを検出している。

Ⅲ. 調査の記録

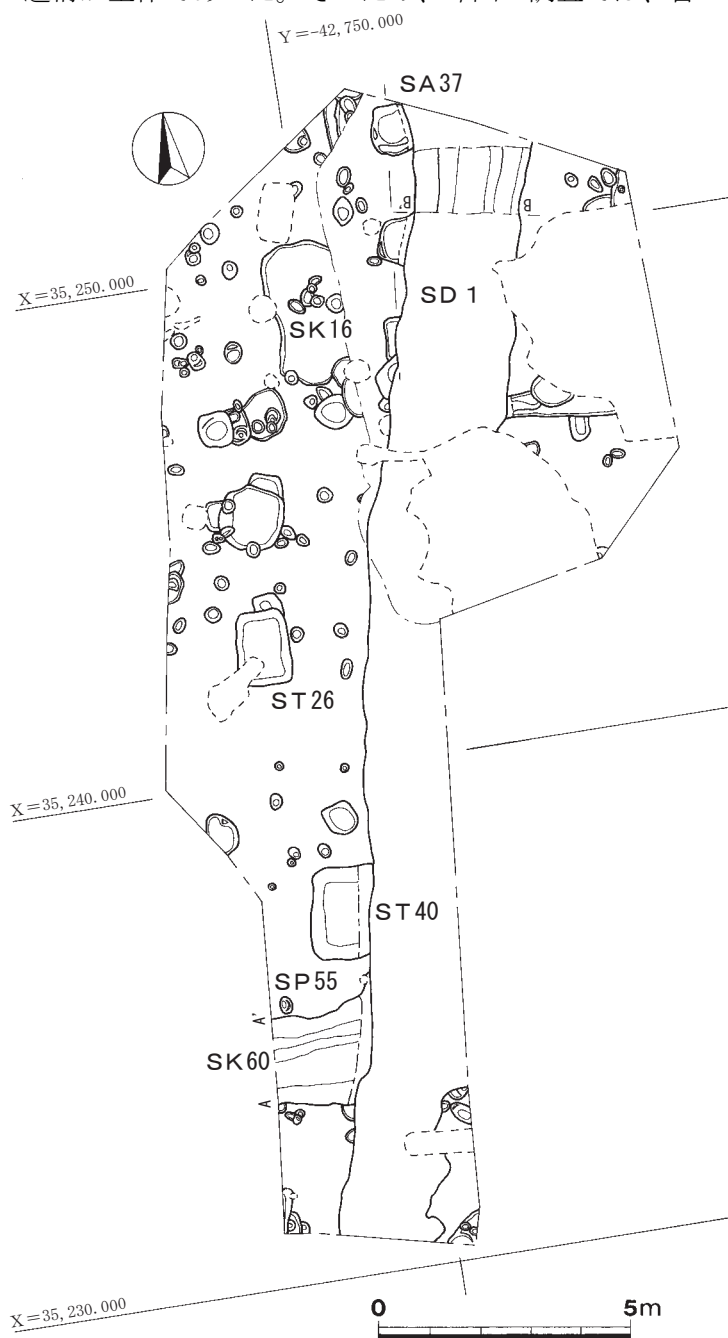
1. 調査の目的と経過

調査地は筑後国府Ⅱ期政庁の北東側約 200mに位置し、これまでの調査では縄文時代以降の遺構や遺物が確認されているが、特に中世以降の遺構が主体であった。そのため、今回の調査では、古代・中世の遺構の広がりを確認することを目的として調査を行った。調査範囲は道路敷設予定地で、機材搬出入口確保のため出入口以外の範囲を調査した。平成 29 年 2 月 6 日に重機で表土剥ぎを開始し、その後、遺構検出、平板測量による略図作成、遺構の掘削を順次行った。必要に応じて、個別の遺構の実測、写真撮影を行い、3 月 23 日に高所作業車から全景写真を撮影し、3 月 24 日に現地調査を終了した。

遺構配置図はトータルステーションを用いて測量し、測量データは株式会社 CUBIC 製の「遺構くん cubic」で編集・保存した。ただし、一部の遺構、土層図は手測り（S=1/10）で記録した。記録写真は、モノクローム・カラーリバーサルともに 6×7 判で撮影した。

2. 基本層序

調査地の現地表面は北から南へ向かって緩やかに標高が下がり、北端と南端で約 30 cm の比高がある。遺構検出面は褐色粘質土で、北西部では遺構検出面上に暗褐色粘質土が約 25 cm 堆積し、南部では遺構検出面上にバラスが約 5 cm 堆積し、地表面に至る。調査区全体が近世以降に削平されたと考え



第 3 図 筑後国府跡第 288 次調査遺構配置図 (1/150)



第4図 調査区全景①（北から）



第5図 調査区全景②（南から）

られ、特に東部は撓乱による削平が著しい。調査区北東部は、撓乱を掘り下げるため表土剥ぎの際に重機で西部の遺構検出面より低めに掘削し、調査区中央部では一部遺構を削平した。

3. 検出遺構

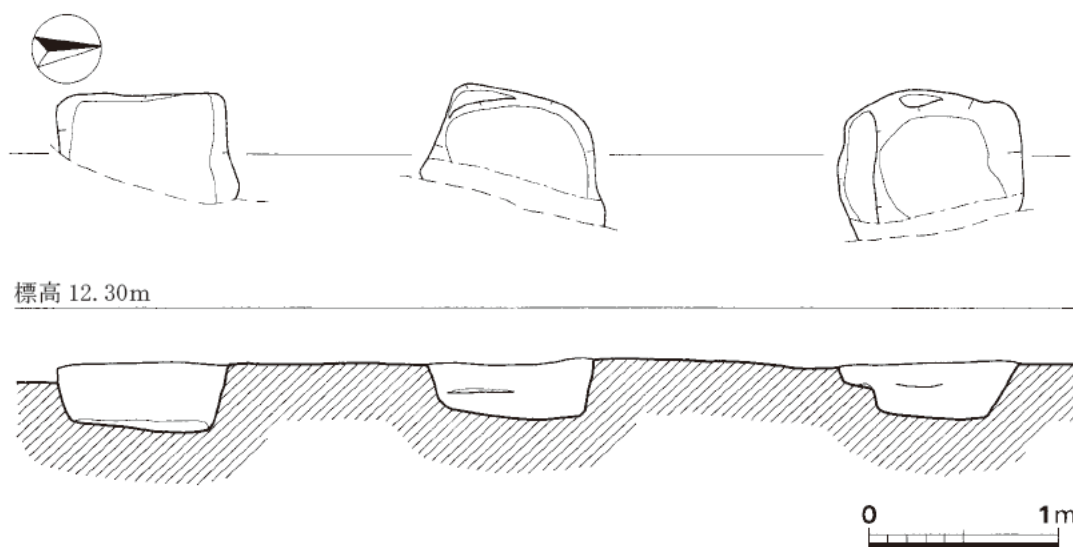
今回の調査では、古代の柵列1条、土坑2基、近世の溝1条、土壇墓2基、その他ピットが検出された。近世以降の遺構が主体である。以下主要遺構について報告する。

古代・中世の遺構

柵列

S A37（第6・7図）

調査区北部を南北方向に延びる柵列である。東半部はS D 1に削平されており、調査区北側や南方向に延びている可能性があり、掘立柱建物である可能性もある。2間分（5 m）、3基の隅丸方形の柱穴を検出した。柱痕は確認されず、各柱穴の東部分は削平されているが、計画方位はN-7°-Eと想定される。埋土中から土師器の坏・小皿・甕などが出土している。遺物からは詳細な時期を判断できない。



第6図 S A37 実測図（1/40）



第7図 SA37 掘削状況（北から）



第8図 SK16 完掘状況（東から）

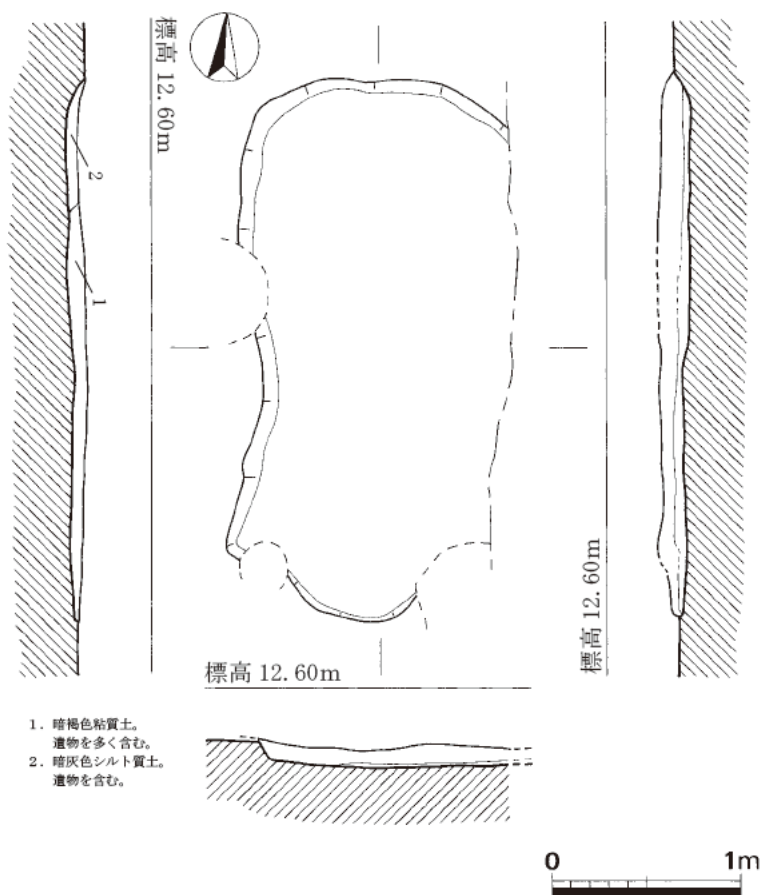
SK16（第8・9図）

調査区北部で検出した土坑である。遺構の東部分を重機で削平してしまい詳細な規模は不明であるが、平面形は隅丸方形、もしくは楕円形を呈すると考えられ、長軸長 2.82m、短軸長 1.42m 以上、深さ 0.1～0.15m を測る。底面はほぼ水平である。埋土中から土師器の坏・小皿・埴・壺・甕、須恵器の蓋・甕、黒色土器A類の埴、黒色土器B類の埴、緑釉陶器の埴、輸入陶磁器の碗などが出土している。遺物の年代から、11 世紀後半～12 世紀前半以降に帰属すると考えられる。

SK60（第10・11図）

調査区南部で検出した土坑である。西部は調査区外へ延び、東部はSD1によって削平される。

東部も調査区外へ延びている可能性があり、溝であることも考えられる。詳細な規模は不明であるが、長軸長 2 m 以上、短軸長 1.7～1.8m、最深部の深さ 0.75m を測る。北部に緩やかなステップを有する。埋土中から土師器の坏・小皿・埴、須恵器の坏・蓋・甕・壺、黒色土器B類の埴、瓦器の埴、輸入陶磁器の碗、平瓦などが出土している。遺物の年代から、12 世紀以降に帰属すると考えられる。



第9図 SK16 実測図（1/40）



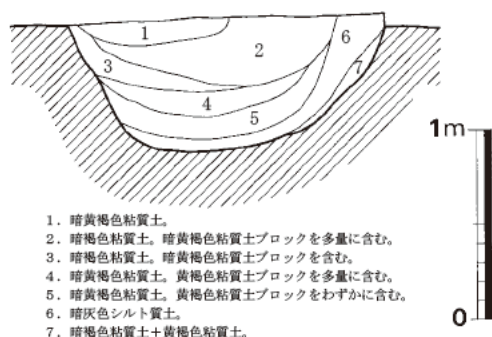
第10図 SK60 完掘状況（東から）



第12図 SD1 土層堆積状況（北から）

標高 12.20m

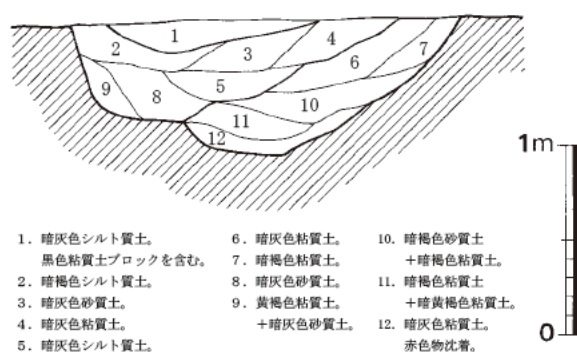
A A'



第11図 SK60 土層断面図 (1/40)

標高 12.30m

B B'



第13図 SD1 土層断面図 (1/40)

近世の遺構

溝

SD1（第12・13図）

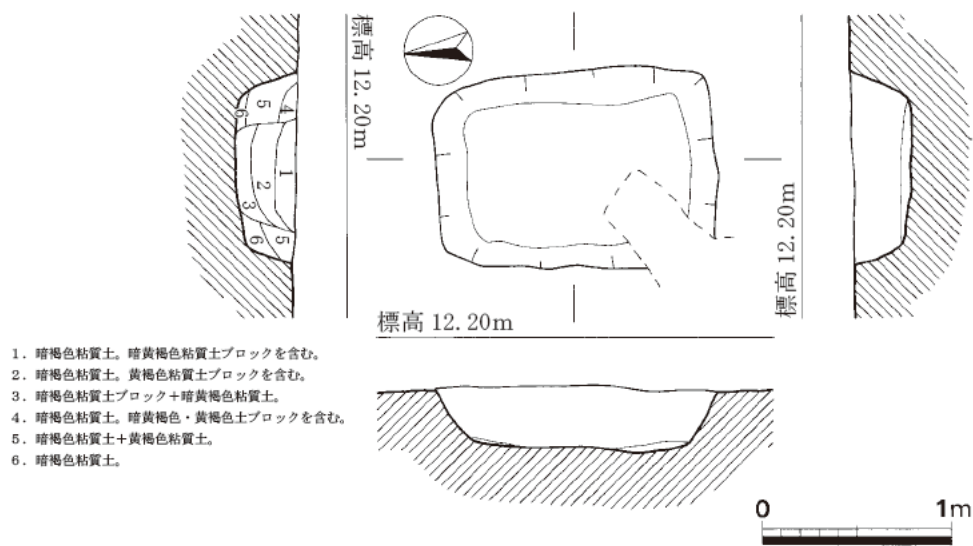
調査区を南北方向に走行する溝である。検出された長さは22mであるが、調査区外へと延びる。上面幅は北部で2.37m、南部で2m、深さは北部で0.73mを測る。土層の堆積から2度の掘り直しが確認される。埋土中からは土師器の坏・小皿・埴・甕・土鍋・焙烙、須恵器の坏・蓋・甕・壺、黒色土器A類の埴、瓦器の埴、近世陶磁器、棧瓦、黒曜石剥片などが出土している。幅広い時期の遺物が出土しているが、最下層から近世陶磁器が出土したことから、18世紀以降に所属すると考えられる。

土壌墓

ST26（第14～16図）

調査区中央部で検出された近世墓である。一部攪乱によって削平されているが、平面形は隅丸方形を呈し、長軸長1.48m、短軸長1.04m、深さ0.35mを測る。底面は平坦であり、完形の陶器皿が出土している。埋土中からは土師器の坏・小皿・埴・甕、近世陶磁器などが出土している。陶磁器の年代から、16世紀後半～17世紀初頭に帰属すると考えられる。

Ⅲ. 調査の記録



第14図 ST26 実測図 (1/40)



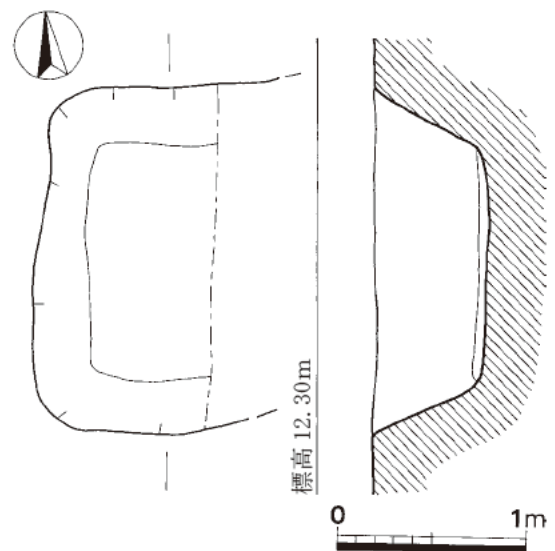
第15図 ST26 土層堆積状況 (北から)



第16図 ST26 遺物出土状況 (北から)



第17図 ST40 掘削状況 (北から)



第18図 ST40 実測図 (1/40)

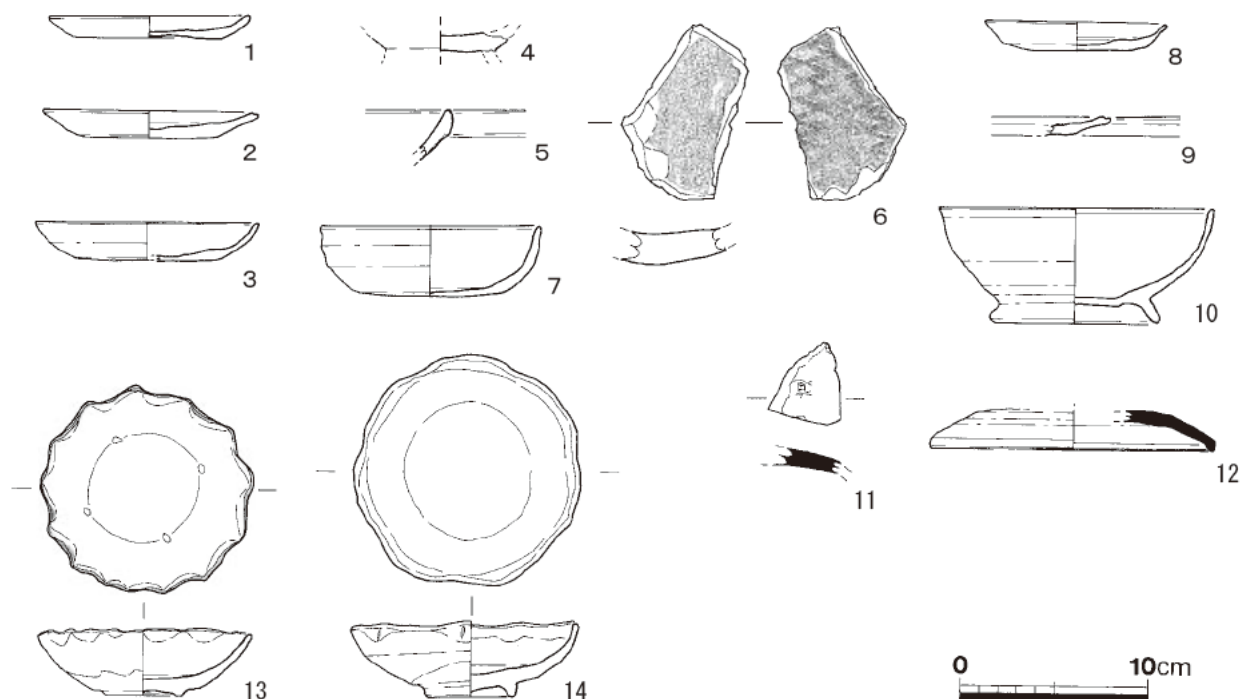
ST40 (第17・18図)

調査区南部で検出された近世墓である。SD1に先行し、東部は削平されている。平面形は隅丸方形を呈すると考えられ、長軸長1.83m、短軸長1.16m以上、深さ0.6mを測る。ST26と同様に底面から完形の陶器皿が出土している。埋土中からは土師器の坏・小皿・碗・甕、近世陶磁器などが出土している。16世紀後半～17世紀初頭に帰属すると考えられる。

4. 出土遺物

パンコンテナー2箱分の遺物が出土したが多くが細片で、実測に耐えうる資料のみを報告する。

2・9は「て」の字状口縁を呈する京都系土師器皿である。11は須恵器壺の肩部であり、外面に「道」の線刻がみられる。13・14はなぶり口の唐津焼の皿であり、13の口縁は鉄釉が施されたいわゆる「皮鯨手」である。その他の詳細については第1・2表の出土遺物観察表を参照されたい。



第19図 出土遺物実測図 (1/4)

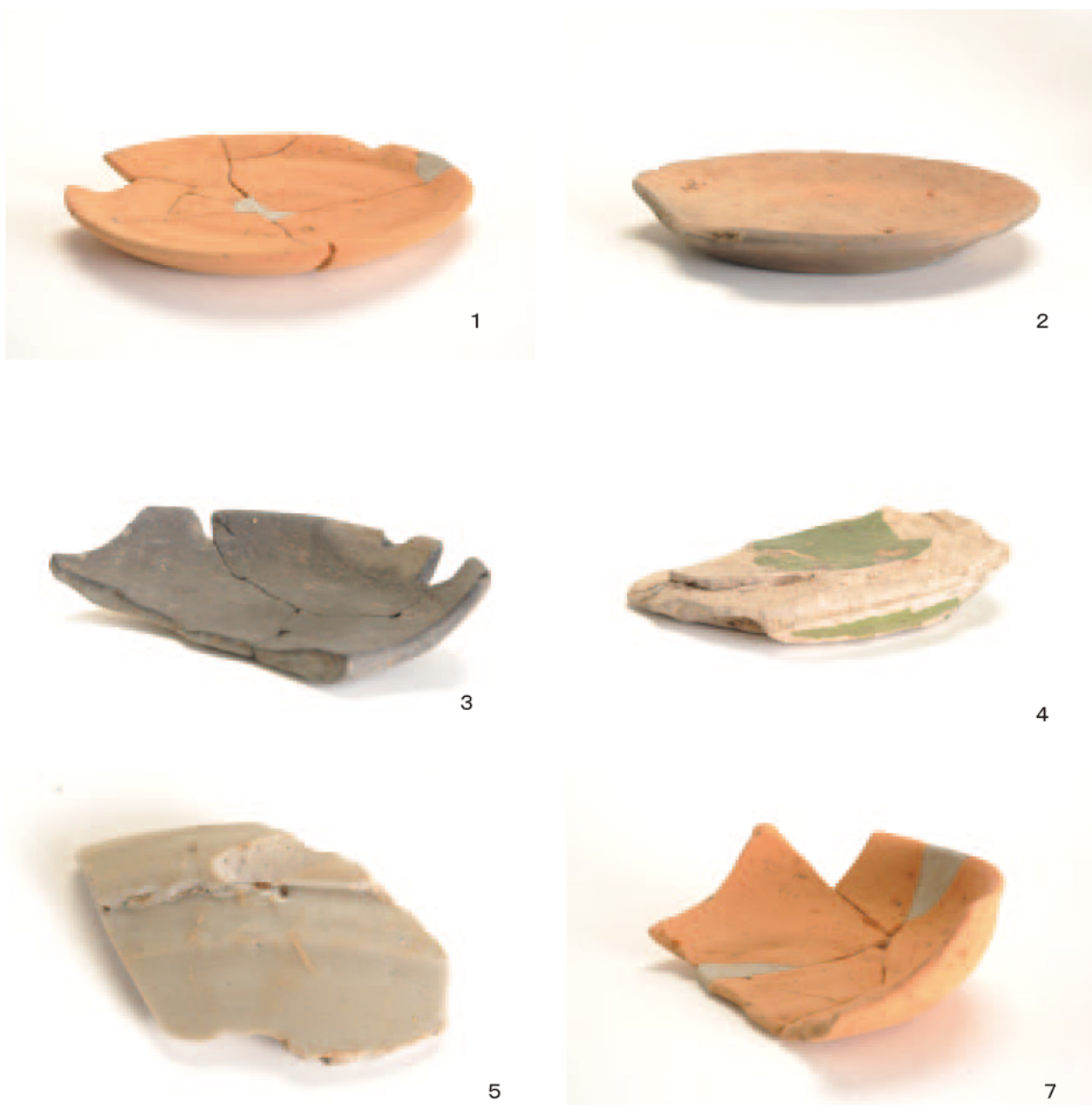
第1表 出土遺物観察表①

遺物No.	出土遺構	種別	器種	法量			色調		調整		胎土	備考	登録番号
				口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)	外面	内面	外面	内面			
1 第19・20図	SK16	土師器	小皿	10.4	7.4	1.2	黄橙	黄橙	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	細砂粒(長石、赤色粒子)		201623 000006
2 第19・20図	SK16	土師器	小皿	11	7.4	1.5	暗灰、橙	橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	細砂粒(赤色粒子、雲母)	「て」の字状口縁	201623 000007
3 第19・20図	SK16	土師器	小皿	[11.7]	[7.6]	2.0	灰白	黒	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	微砂粒(雲母、長石)		201623 000008
4 第19・20図	SK16	緑釉陶器	碗	—	—	(1.0)	(釉)オリーブ (地)灰白		回転ナデ ヘラ切り	ミガキ	微砂粒(角閃石)		201623 000009
5 第19・20図	SK60	白磁	碗	—	—	(2.7)	(釉)灰白 (地)灰白		ヘラケズリ	回転ナデ	精良	太宰府分類 白磁IV類	201623 000014
6 第19・20図	SK60	瓦	平瓦	(9.1)	(5.7)	(1.8)	灰	黄灰	布目	斜格子 スリケン	砂粒(長石)		201623 000013
7 第19・21図	SP55	土師器	坏	[11.4]	[7.5]	3.8	橙	橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	細砂粒(赤色粒子)		201623 000012

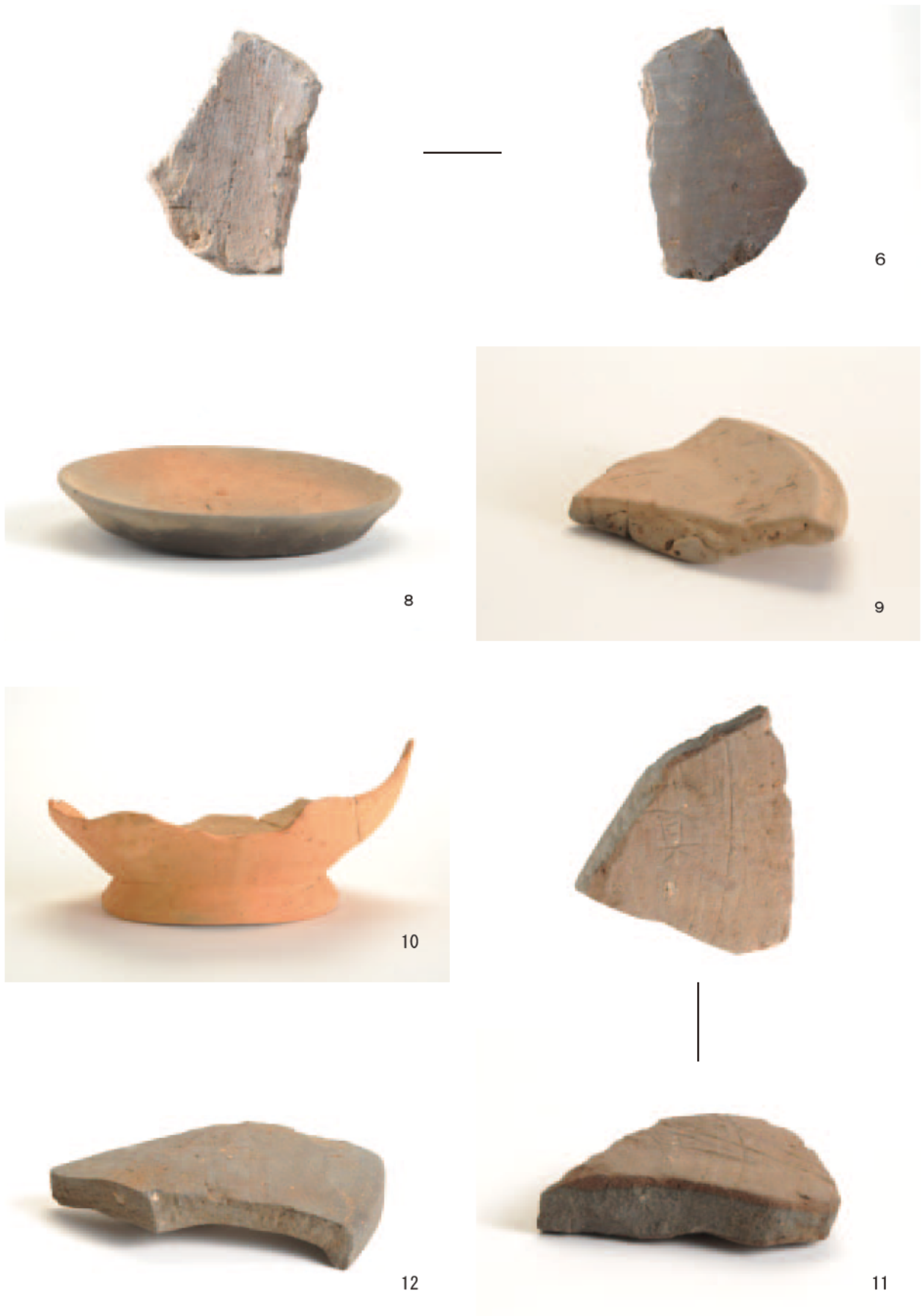
Ⅲ. 調査の記録

第2表 出土遺物観察表②

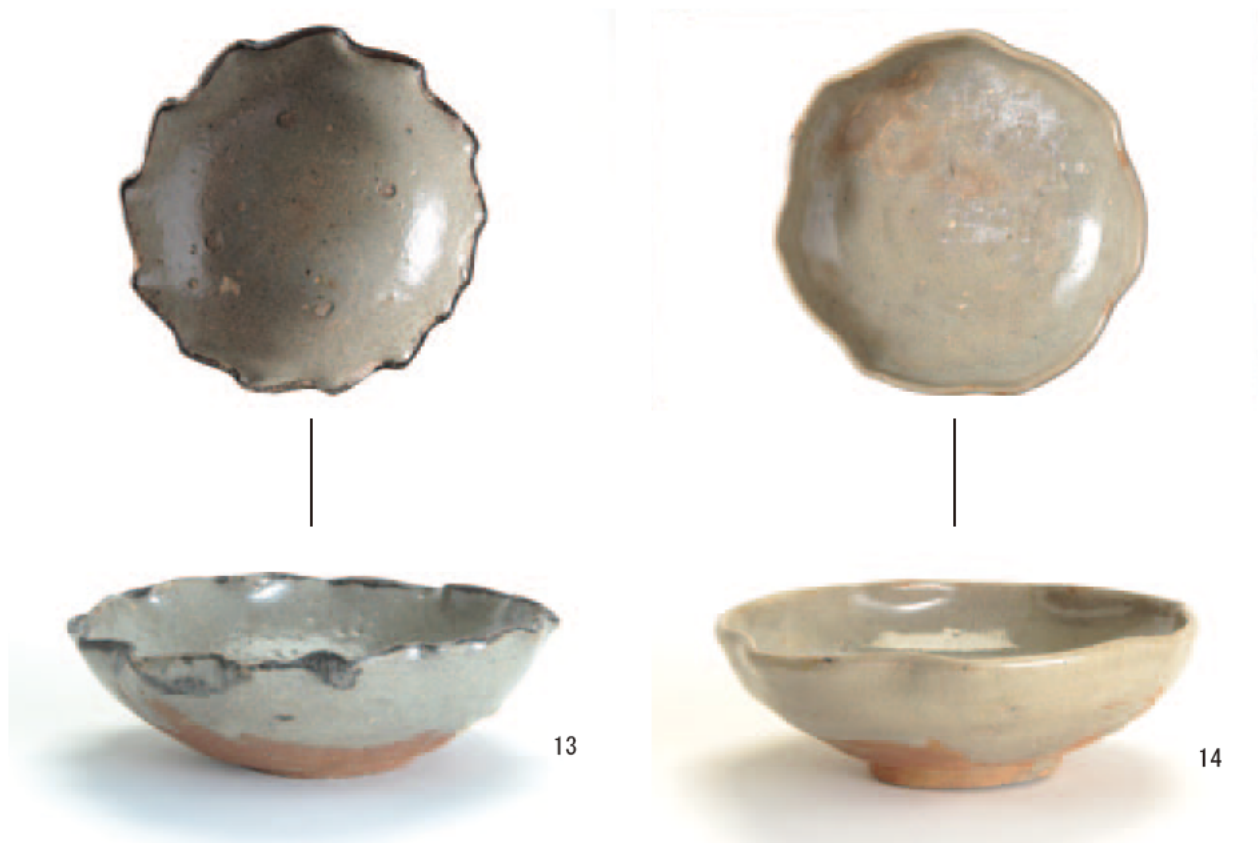
遺物No.	出土遺構	種別	器種	法 量			色 調		調 整		胎 土	備 考	登録番号
				口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)	外面	内面	外面	内面			
8 第19・21図	SD1	土師器	小皿	9.3	7.5	1.6	浅黄	にぶい黄 橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	細砂粒(赤色粒子)		201623 000001
9 第19・21図	SD1	土師器	小皿	—	—	1.0	にぶい黄 橙	にぶい黄 橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ	細砂粒(赤色粒子、雲母)	「て」の字状口縁	201623 000005
10 第19・21図	SD1	土師器	埴	[14.3]	8.6	6.1	橙	浅黄橙	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	細砂粒(赤色粒子、雲母)		201623 000004
11 第19・21図	SD1	須恵器	壺	—	—	(1.3)	灰褐	灰褐	回転ヘラケズリ	回転ナデ	細砂粒(長石)	「道」の線刻	201623 000003
12 第19・21図	SD1	須恵器	蓋	[14.8]	[10.1]	(2.1)	灰	灰	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	砂粒(石英)		201623 000002
13 第19・22図	ST26	陶器	皿	10.2 ～11.7	4.1	3.6	(軸)オリーブ灰 (地)赤褐		回転ヘラケズリ ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	細砂粒(長石)	なぶり口、皮鯨手	201623 000010
14 第19・22図	ST40	陶器	皿	10.2 ～10.8	4.3	4.1	(軸)緑灰 (地)明褐		回転ヘラケズリ ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	精良	なぶり口	201623 000011



第20図 出土遺物写真①



第 21 図 出土遺物写真②



第 22 図 出土遺物写真③

IV. 総括

今回の調査では、周辺の調査と同様に古代から近世の遺構が確認され、特に近世が大部分を占めた。包含層が確認できなかったことから、調査区全体が削平を受けていたと考えられる。また、近世の遺構の埋土に、古代・中世の遺物が多く混入していることから、古代・中世の遺構が近世以前は広がっていたことが想定される。

筑後国府Ⅱ期政庁の時期の確実な遺構は確認されていないが、S A37 の柱穴の掘方は、第 4 次調査で検出された柱穴の掘方と平面形類似しており、この時期に帰属する可能性がある。生活痕跡が確実に確認できるのは、S K16 の 11 世紀後半から 12 世紀前半以降である。S K16 や S D 1 から出土した口縁部が「て」の字状の京都系土師器皿は 10 世紀後半から 12 世紀前半にかけて出土する傾向があり、東地区の北に位置する北地区で多く確認されている。周辺の調査でも 11 世紀から 12 世紀代の遺構は複数確認されており、北・東地区では集落が広がっていたことが想定され、中世「枝光村」の起源を知る手がかりになりうる。16 世紀後半～17 世紀初頭になると S T26・40 などの近世墓が営まれる。東地区南西部に位置する第 234 次調査でもなぶり口で「皮鯨手」の陶器皿が出土しており、東地区の北半部ではこの時期から遺構が増え始める。

今回の調査では、これまでの調査と同様に幅広い時期の遺構が検出されたが、近世に至り、遺構の広がりが著しくなることを再確認した。

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちくごくふあと-だいにひやくはちじゅうはちじちようさほうこく								
書 名	筑後国府跡-第288次調査報告-								
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書								
シリーズ番号	第 3 9 0 集								
編著者名	小川原 励								
編集機関	久留米市 市民文化部 文化財保護課								
所 在 地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 Tel 0942-30-9225 Fax 0942-30-9714 Email : bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp								
発行年月日	2 0 1 7 （平成 2 9）年 1 2 月 2 5 日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地		コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
			市町村	遺跡番号					
ちくごくふあと 筑後国府跡 だいにひやくはちじちようさ 第288次調査	ふくおかけんくるめし 福岡県久留米市 あいかわまち 合川町 1086		40203	30112	33 ° 19 ' 1 "	130 ° 32 ' 27 "	20170206 ～ 20170324	181 m ²	記録保存調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構			主な遺物		特 記 事 項	
筑後国府跡 第288次調査	集落	奈良 平安 鎌倉 近世	柵列 土坑 溝 土壇墓	1 条 2 基 1 条 2 基	土師器・黒色土器 須恵器・緑釉陶器 輸入陶磁器・近世陶磁器 瓦・石製品		近世の遺構が主体を占め、溝や土壇墓などが確認された。		
要 約									
調査地は筑後国府Ⅱ期政庁の北東側約150mの合川町字東に位置する。調査区の東半は攪乱により削平されているが、古代～近世の遺構が確認された。特に近世の遺構が主体であり、中世以前の遺構は少ない。東地区の北部は近世の集落の中心があったと考えられ、中世以前の遺構の削平が著しい。									
土木工事の届出日		平成28年 8 月23日			遺物の発見通知日		平成29年 3 月30日 (28文財第1878号)		

筑後国府跡

― 第 288 次発掘調査報告 ―

久留米市文化財調査報告書 第 390 集

平成 29 年 12 月 25 日

発 行 久 留 米 市 教 育 委 員 会

編 集 久留米市 市民文化部 文化財保護課

福岡県久留米市城南町 15-3

印 刷 服部印刷株式会社

久留米市梅満町 410-1